

## 発見された各時代の遺構

【縄文時代】後期（約3500年前）の遺物を含む、幅約3～5.5m・深さ約70cmの河道がみつかりました（河道1）。今回は住居などの遺構はみつかりませんが、近隣に生活の場がある可能性があります。下層には、犬上川が川筋を変えながら土砂を堆積させていった様子が確認されました。

【弥生時代】次に生活の営みが確認されるのは、弥生時代後期（約2000年前）です。竪穴住居が1棟みつかりました（竪穴住居1）。約6.5m四方の方形の住居で、中央付近に炉を持ちます。

【古墳時代】続く古墳時代前期（約1700年前）には、重複する約4～5.5m四方の方形の竪穴住居がみつかりています（竪穴住居2・3）。古墳時代中期（約1600年前）には約6.5m四方の方形の竪穴住居が確認され（竪穴住居4・5）、竪穴住居5からは、朝鮮半島由来の韓式系土器がみつかりています。

古墳時代後期（約1500年前）には、住居などの遺構が大規模に展開されるようになります。調査区を幅約1～1.5m・深さ約80cmの溝が横断し（溝1）、ほぼ直行する向きに幅7.5～10m・深さ約40cmの溝がみつかりました（溝2）。これらの溝は遺物の出土状況から飛鳥時代までは機能していたと考えられます。さらに、3.5～5.5m四方の方形で、造りつけカマドを持つ竪穴住居も確認されています（竪穴住居6～8）。

【飛鳥時代（約1400年前）】竪穴住居とともに掘立柱建物・柵がみられるようになります。造りつけカマドを持つ約5m四方の方形の竪穴住居（竪穴住居11・12）、掘立柱建物（掘立柱建物1～6）が確認されています。ほかに約6.5m四方の方形の竪穴住居が確認されており（竪穴住居9・10）、この頃までに建てられたものと思われる。

【奈良時代（約1300年前）】東西に整然と並ぶ2棟の総柱の掘立柱建物が出現します（掘立柱建物7・8）。これらは倉庫と考えられ、いずれも20畳前後の広さがあります。また約8m南には掘立柱建物がみつかりました（掘立柱建物9）。この時期には周辺の物資を集約する機能を担う機関があったと考えられます。

【平安時代（約1200年前）】掘立柱建物1棟（掘立柱建物10）、井戸、河道（河道2）などがみつかりました。井戸は井戸杵を持たない素掘りのもので、二彩陶器・緑釉陶器などが出土しています。これらの土器は日常雑器ではなく高級食器です。また河道は幅14m以上・深さ約1.5mで、白磁や灰釉陶器のほか、土師器・須恵器といった土器類、下駄・曲物などの木製品、金属製の帯金具など、平安時代を中心とした複数時期の様々な種類の遺物が含まれています。

【鎌倉時代（約800年前）】幅約3m・深さ約1mの溝がみつかり（溝4）、土器のほか漆器などの木製品や砥石などの石製品が出土しています。

## まとめ

今回の調査では、縄文時代後期～鎌倉時代の長期間にわたる遺構・遺物がみつかり、古墳時代後期以降は大規模に展開する様子がうかがえます。特に奈良時代以降については一般集落とは異なる様相を示し、役人や位の高い人の出入りするような施設、また物資の集約とともにそれらを管理するような施設が福満遺跡やその周辺にあったと考えられます。さらに、それ以前から人々が生活しており、当該地一帯は連綿と続く重要な場所であったことがうかがえます。遺跡の全貌そして周辺の歴史については、今後の調査・研究によって、ますます解明されていくものと思われます。

# レトロ・レトロの展覧会 2019 秋の特別三二陳列

## 人が暮らし、物が集う～掘り出された器あれこれ～



## はじめに

福満遺跡は、彦根市西今町に所在する、縄文時代から鎌倉・室町時代にかけての遺跡です。

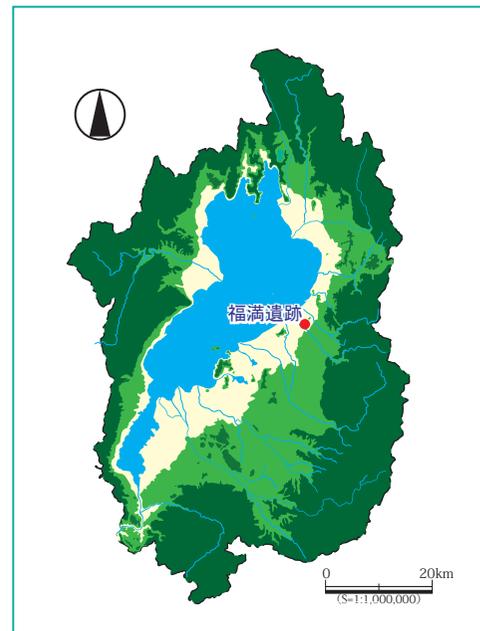
福満遺跡が知られるようになったのは、大正7年（1918年）に水田面から約1m下で、弥生土器が見つかったのがきっかけです。その後、城南小学校・城南保育園の建設や周辺の宅地開発にともない、昭和56年（1981年）以降の22回にわたる発掘調査によって、土器や石製品などとともに住居や溝などの集落遺構がみつかり、福満遺跡は様々な時代の遺構が重なる複合遺跡であることがわかってきました。

今回のレトロ・レトロの展覧会では、出土した様々な時代の「器」に焦点を当てて福満遺跡の調査成果を紹介します。

## 福満遺跡の位置と見つかった遺構

福満遺跡は、彦根市内を流れる犬上川の右岸に所在し、低地の氾濫原から微高地の自然堤防上に位置します。市域では平安時代から「条里制」といわれる国家的な耕地整理が普及したことが知られていますが、同遺跡は河川に近接しており、度重なる犬上川の氾濫のため、この耕地整理が及ばない場所だったようです。

発掘調査では、縄文時代の河道、弥生時代・古墳時代の住居、飛鳥時代の溝、奈良時代・平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の溝などがみつかりました。



福満遺跡の位置



福満遺跡周辺地図



様々な時代の建物跡や川の跡が発見されました

## 縄文土器

縄文土器は、今から約12,000年前から約2,400年前まで続いた縄文時代に作られていた土器です。縄文時代は狩猟採集で暮らしていた時代で、縄文土器は食糧の煮炊きなどに使われていたようです。

福満遺跡では、縄文時代後期（約3,500年前）の「深鉢」と呼ばれるタイプの土器が河道から出土しました。



縄文土器 深鉢

## 弥生土器

弥生土器は、今から約2,400年前から約1,700年前まで続いた弥生時代に作られていた土器です。弥生時代は日本列島でコメ作りが始まった時代で、土器にも壺や高坏など、縄文時代にはなかった器形が登場しました。

福満遺跡では、弥生時代後期（約2,000年前）の「直口壺」と呼ばれるタイプの土器が、器台に載せられ、さらに蓋をされていたことがわかる状態で竪穴住居の中から見つかりました。



弥生土器 直口壺

## 土師器

土師器は弥生土器の流れをくむ土器で、古墳時代以降に作られました。赤褐色や灰白色の素焼きの土器で、煮炊き用や食器として広く使われました。

福満遺跡でも、土師器は非常にたくさん出土しています。その中に、須恵器の技法を用いて作られた土器がありました。これは「韓式系土器」と呼ばれ、朝鮮半島由来のものと見られます。



韓式系土器 鉢

## 須恵器

須恵器は朝鮮半島から伝わった新しい技術を用いて作られた青灰色の硬質の土器で、古墳時代中期（5世紀）以降平安時代まで作られました。ろくろを用いて作られていて、食器や貯蔵用として使われました。

福満遺跡でも、古墳時代の「短頸壺」と呼ばれるタイプのものや飛鳥時代の「坏」と呼ばれる蓋つきの器など、たくさん出土しました。



須恵器 短頸壺



須恵器 坏身

## 施釉陶器

土器に釉薬をかけて焼くことで、光沢のある仕上がりにしたものを施釉陶器といいます。主な釉薬の種類として、唐三彩、奈良三彩、緑釉、灰釉などがあります。三彩は白地の上に銅に由来する釉（緑釉）と鉄に由来する釉（黄釉）をかけたもので、福満遺跡では小さな破片が1点出土しました。

緑釉陶器は器の内外面に緑釉をかけたもので、福満遺跡でも数点出土しています。

灰釉は植物を焼いた灰を溶かした水に由来する釉薬で、灰白色に仕上がります。平安時代の終わり頃には施釉が省略された粗雑なつくりの土器が出現し、「山茶碗」と呼ばれます。



緑釉陶器 碗



山茶碗（墨書土器）

## 黒色土器

近畿地方の平安時代における特徴的な土器で、土師器の伝統を受け継ぐ技法で作られています。素焼きの器の表面に煤を吸着させることで黒く仕上げ、内面のみ黒いものと内外面ともに黒いものがあります。



黒色土器 碗

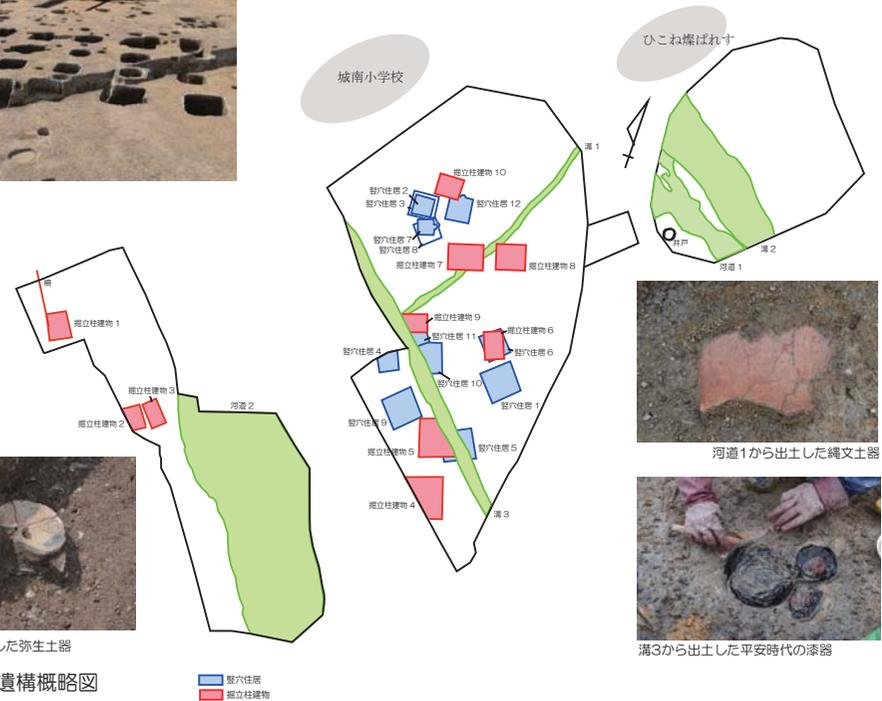


掘立柱建物7



竪穴住居1から出土した弥生土器

## 福満遺跡 遺構概略図



河道1から出土した縄文土器



溝3から出土した平安時代の漆器